道真の、死を前にしての切迫した心境がうたわれている。この詩は延喜二年十二月ころに作られたものであろう。後世の伝説によればそのころ都では、池の水が尽く紅水となり、氷は連日にわたって解け、潜んでいた何万という魚が泡をふいて死んで浮かびあがり、神泉苑の水の色が、紫の袍の色になったと伝えられる。こういう伝説をよびおこす契機の一つは、この後集の抒情詩の切迫したいぶきの訴える力によるところがあるであろう。

（七三九頁）

更に、川口久雄氏は同書の補注として三句目の「此の賊　逃るる處なし」の箇所の説明で

『天台止観一』に「四山合来、無逃避処」とあるに拠る。四山とは老病死衰の四相を山にたとえ、のがれるところがないという説

（岩波古典文学大系『菅家文草・菅家後集』補注　七三九頁）

と、注目すべき指摘をなされている。

ここで、「四山」について『佛教大辞彙』（龍谷大学編纂）より以下に説明文を引用してみる。

【四山】常に生・老・病・死の四苦に迫られ人身の無情なる相を四大山の下にありて逃るゝことなきに喩へたるもの。北本涅槃經（ねはんきょう）卷二十九【同南本卷二十七】には波斯匿王に対する説法を述べ「大王、親信の人あり、四方より来りて各々是言をなさん。大王、四大山あり、四方より来りて人民を害せんとすと、王若し聞かば何の計をか設くべき、王言く、世尊設し此れ来らば逃避する處なからんと（中略）我説く、四山と